

## 感染症・予防接種レター（第31号）

日本小児保健協会予防接種委員会では「感染症・予防接種」に関するレターを毎号の小児保健研究に掲載し、わかりやすい情報を会員にお伝えいたしたいと存じます。ご参考になれば幸いです。

日本小児保健協会予防接種委員会委員長 加藤達夫

予防接種委員会

委員長 加藤 達夫  
住友眞佐美

副委員長 岡田 賢司  
多屋 馨子

庵原 俊昭  
馬場 宏一

宇加江 進  
三田村敬子

古賀 伸子

## 北海道および札幌市の麻疹ゼロ作戦について

この記事が会員の皆様が届くころには麻疹風疹の2種混合ワクチンが開始され、少し落ち着いているころと思われる。この麻疹風疹ワクチンの2回接種が軌道に乗ったとしても接種率が低く集団免疫率が維持されない場合は流行が再燃することに関しては昨年の第6号のこのコーナーでもとりあげられている<sup>1)</sup>とおりである。今回は麻疹ワクチン接種率向上のため、市立札幌病院 富樫武弘前院長が中心となって、北海道および札幌市において活動している麻疹ゼロ作戦<sup>2)</sup>について紹介したいと思う。

### 1. 麻疹の流行

平成13年に北海道で麻疹の小流行があり、さらにこれ以前にはほぼ定期的に数年おきに小流行があった。札幌市も平成13年の場合は第1週から第38週（9月中旬）までの間に麻疹報告定点から925例の発症報告があった。発症のピークは第16週（4月中旬）で、罹患者の主体はワクチン未接種の乳幼児であったが、ワクチン接種者も含む年長児や成人にも罹患者を認めた。定点のカバー率と人口比から推定すると、この流行での発症数は札幌市で約4,500名、北海道で13,000名となる。この流行で3例の脳炎の合併例が報告され、うち1例17歳女性が死亡した。私どもも以前は少なかった新生児例<sup>3)</sup>を平成8年に、年長児、成人の症例<sup>4)</sup>を平成13年にそれぞれ経験している。

その後平成15年には散発例の報告があった。第1週

から第26週（6月下旬）まで発症し、札幌市、苫小牧市を中心に中学校、高等学校での集団発症が目立った。やはりワクチン未接種者が罹患者の中心ではあったが、既接種者からの発症もあった。北海道保健福祉部がまとめた小児科定点からの報告された発症数は表示（表1）したとおりで減少傾向にある。

### 2. 麻疹ワクチン接種状況

麻疹から逃れる最良の方法がワクチン接種である。接種後7～10日後に軽度の発熱、軽度の発疹等の副反応がみられることがあるが、アナフィラキシーなどの重篤な副反応の心配はほとんどなく比較的安全に接種できる。

北海道には平成11年から感染症危機管理対策協議会流行調査専門委員会が設置されており、感染症の流行調査、予防のための情報提供および予防接種に関することが協議されてきた。そこで道内の接種率を計算することになったが、計算方法がまちまちであり、接種数を分子にする点は共通であるが、分母に前年度の出生数をあてている市町村が39あった。本来は前年度の出生数に未接種者を加えて分母にして計算するのが正しいが、その把握が難しい。北海道は保健福祉部長官により平成14年3月5日付けで全道212市町村長宛に「麻疹の予防接種のかかわる市町村実態調査」を依頼した。これは市町村が行う「1歳6か月児健診」、「3歳児健診」において予防接種歴・未接種理由を確認して、予防接種の状況を把握する目的とするもので、調査期間を平成14年から5年間とした。平成14年度、15年度の結果は表2、3に示す。

麻疹の発症をゼロにするためにはワクチン接種率を上昇させ95%以上にしなければならないとされており、北海道ではまだ達していないし、札幌市でも1歳6か月児はまだである。今後はMRワクチンの第1期

表1 麻疹発症数の推移（麻疹定点からの報告数）

|     | 平成<br>13年 | 平成<br>14年 | 平成<br>15年 | 平成<br>16年 | 平成<br>17年 |
|-----|-----------|-----------|-----------|-----------|-----------|
| 北海道 | 3,263     | 295       | 215       | 44        | 19        |
| 札幌市 | 925       | 22        | 118       | 1         | 0         |

表2 平成14年度麻疹ワクチン接種率

|     |           |                |                     |
|-----|-----------|----------------|---------------------|
| 北海道 | 1歳半<br>健診 | (受診率<br>86.8%) | 32,775/39,310=83.4% |
|     | 3歳健<br>診  | (受診率<br>84.5%) | 35,901/38,361=93.6% |
| 札幌市 | 1歳半<br>健診 | (受診率<br>80.0%) | 10,078/11,530=87.4% |
|     | 3歳健<br>診  | (受診率<br>77.5%) | 10,445/10,878=96.0% |

表3 平成15年度麻疹ワクチン接種率

|     |           |                |                     |
|-----|-----------|----------------|---------------------|
| 北海道 | 1歳半<br>健診 | (受診率<br>93.9%) | 35,540/41,112=86.4% |
|     | 3歳健<br>診  | (受診率<br>91.5%) | 35,939/38,277=93.9% |
| 札幌市 | 1歳半<br>健診 | (受診率<br>90.0%) | 16,312/18,180=89.7% |
|     | 3歳健<br>診  | (受診率<br>86.0%) | 10,958/11,286=97.1% |

は2歳までの接種となり、今まで以上に早い時期での接種率の向上が大事と考えられる。

### 3. ワクチン接種率向上作戦

平成13年5月26日に開催された北海道小児科医会(南部春生会長)総会で、5年以内に北海道内から麻疹をなくそうとの決議が採択された。これを受けて「北海道麻疹ゼロ作戦」と銘打って具体的行動を開始した。札幌市も同様に札幌市小児科医会(古山正之会長)を中心に同様の活動を開始した。

#### 1) 行政機関との共同作戦

北海道小児科医会、札幌市小児科医会は北海道保健福祉部、札幌市保健福祉局に対して協力要請を行った。第1に前述した健診時の接種率把握をすること、第2は未接種者への積極的接種勧奨をすること、第3は市町村の接種担当医師、保健師に対して接種の必要性教育を徹底すること、第4は個別接種の推進と市町村の枠を越えての接種を可能にすることなどである。札幌市保健福祉局は平成15年6月から行政の行う10か月児健診時に保護者に「はしかシール」を渡し、自宅にあるカレンダーの児の誕生日にこれを貼るようお願いすることにした。同じシールを増刷して、札幌市以外の道内の市町村にも配布した。

#### 2) 広報活動

平成14年秋以降、「はしかゼロをめざして—ワクチン接種をすすめよう—」と題する講演会を札幌市内において約半年間で4回開き、その後は「ワクチン接種をすすめよう—子供たちに健康な未来を—」とタイトルを変え、年2回程度で続けられている。対象者は小児科医、保健福祉関係者、保育所・幼稚園関係者

である。演者は原則的には行政機関から1名と医師から1名担当する。

#### 3) はしか対策全国小児科医連絡協議会

平成15年4月に福岡市で第1回のはしか対策全国小児科医連絡協議会が開かれた。事務局を沖縄県立中部病院に置き、同時にメールネットワーク「hashika-0-project」がスタートした。この会は平成17年まで毎年開催されて、はしか根絶の運動を全国に発信し続けている。

なお、本原稿の投稿後の平成18年4月の第109回日本小児科学会学術集会にて、富樫武弘前院長が平成16年度には北海道の3歳時の麻疹ワクチン接種率が95%を超え、さらに平成17年の北海道内の定点では麻疹の患者発生の確認例はなかったことを発表した。

#### 文 献

- 1) 庵原俊昭. 集団免疫率からみるMRワクチン2回接種法の誤解. 小児保健研究 2005; 64: 820-821.
- 2) 富樫武弘, 他. 麻疹撲滅に向けての実践的研究—札幌市から麻疹ゼロへ—第4報. 札幌市保健福祉局 2005; 増刊 231: 129-130.
- 3) 宇加江 進, 他. 生後12日目に発症した麻疹肺炎の1例. 札幌社会保険総合病院医誌 1998; 7: 23-25.
- 4) 宇加江 進. 年長児, 成人麻疹27例の臨床的検討. 小児感染免疫 2002; 14: 344-348.

(文責: 宇加江 進)